

アカデミア メランコリア (第16回) (若手のコラム)

北海道大学大学院環境科学院、Institute for Marine and Antarctic studies, University of Tasmania 吉田 和広

現在、私は博士研究の一環としてオーストラリアのタスマニア大学・Institute for Marine and Antarctic Studies(IMAS)に1年間滞在し、海氷の生物学を研究しています。今回、東大の山口さんから声をかけてもらい、このような機会をいただいたので、私見ではありますがオーストラリアと日本の研究生活の違いについて少々書いてみたいと思います。



まず、タスマニアに住み始めて感じたことは、博士学生に対する認識が日本と異なることです。私が住んでいる街が大学に近いこともあるでしょうが、偶然知り合った人や、街で声をかけてきた見知らぬ人でも、4年間で卒業だの、論文がどうだの、と博士課程というものがどういうのかを、知っているのが驚きでした。日本で友人と会って、何してるかと聞かれ、博士研究をしていると答えると、「博士課程って何？」と再度問われる、というやり取りを何度もやってきた身としては非常に新鮮でした。

それはひとえに、オーストラリアの高等教育や博士学生に対する考え方も影響しているかもしれません。私は、IMASの正規学生としても在籍していますので、オーストラリアの奨学金をもらっています。奨学金の額は、なんと月に20万円程度で、ほぼ大部分の博士学生がその額をもらえます。日本では、学振に通ることがほぼ唯一の救済される道でしたが、私のように、それにもれば最低3年間耐え忍ぶ以外にありません。金銭的援助もあってか、IMASの博士学生の数も非常に多く(子育てをしながら博士研究する人も)、同じ一つの研究室に博士の同期がいる状況も新鮮に感じました。何年か前に返済不要の奨学金を日本でも作りたい話がありましたが、結局、博士課程などの学生の援助を始めることが、よく言われる研究の活性化の大きな要件の一つではないかと思えます。

研究者の皆さんは朝9時に来て、とにかく大人数でミーティングをして、5時に文字通りクモの子をちらすように家に帰っていく生活を月一金で送っている感じでした。研究ミーティングでは、毎回いろんな人が入れ替わり立ち替わりし、ミーティングに行く 때마다何人か知らない人がいたりして、とにかくオープンな雰囲気大切にしているような感じでした。また、夜(といっても午後7時程度)まで実験をしようものなら、「時間の使い方が間違っている」とか「もっと人生を楽しみなさい」などと叱責いただくことになり、最初は若干のいらだちを覚えました。そういう生活が正しいとされる世界なんだと割り切ることにしました。自分の時間や家族との時間を大切にすることは素晴らしいことだと思いますし、たまには飲み連れて行ってくれますが、日本の研究室で先輩や後輩とアルコール飲料片手に話している際に、時折出てくる研究の話や妄想に心躍らせていた私にとっては、ほぼ全員が5時には帰ってしまうのは、一つのモチベーションを失ったようにも感じました。

書いてみると、月並みな海外留学記みたいになってしまいました。はじめは、あまり船に乗らなくてよさそうという誤った考えに基づいて海氷研究をはじめましたが、長期にわたって南極・海氷研究の本丸にして自然豊かなタスマニアへ行く機会をいただけたとは予想していませんでした。海洋学会等で皆様の御批正を賜れるよう、タスマニアでの多くの出会いを早めに結実させたく思います。